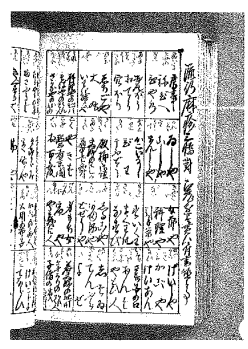
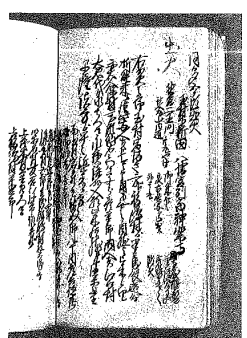


三右衛門日記(四)



御同人様御手代
大越佛輔様

當申年三月三日大雪ヲル
御大老伊井掃部頭様水戸浪人ニ御登城先桜田御門外ニ御狼藉御首を被討候、何分御雪ニ而三尺先者一切雪ニ而不見由、双方余程之怪我人遺死も多し、直様御片付伊井様御病氣之由、御家老様御登城之御義ニ候、右ニ付御國与リ諸士大勢御屋敷江追々入込、諸大名様方御用意与之下方風聞専らニ御座候、横濱遠御方御方并関東御取御出役様方御話ニて、道案内之もの迄御呼上ケニ而所々御聞ラ立御嚴重之御事ニ候

一、まゆ直段
相場三ツニ成、七月十日之頃
三五分与成八月ニ成二ツ四五分与成ル
但桐生町者勿論之屋敷世ニ統ニ成リ宮方

待望の玉村町誌別巻VII

三右衛門日記(四)がここに発刊されました。

この度玉村町では「三右衛門日記(四)」を刊行致しました。この日記は玉村町寄場組合大惣代の渡辺三右衛門が、天保十三年から明治二年まで二十八年間の御用・私用にわたって記録したものです。総丁数四七〇〇、原稿用紙一万四千枚の大作です。日記四は安政六年から文久三年までの五年間の記録で今から百三十年前の日記です。

この頃、国では神奈川・長崎・箱館の開港、江戸城本丸炎上、咸臨丸アメリカ出港、生糸横浜直送禁止、桜田門外の変、河竹黙阿弥「三人吉三郎初買」初演、五稜郭完成、和宮降下、慶喜將軍後見職就任、新撰組活躍、下関・鹿兒島の夷国船砲撃とまさにNHKドラマ「徳川慶喜」の時代そのものでした。

では玉村地方のその時代はどうだったのでしょうか。日記に当たってみましょう。例の通り盗賊・密通・八幡宮祭礼の喧嘩等は数えきれないほどありますが、観照寺の普請完成、八幡宮仁王門の仁王を新河岸から寛永寺末寺に送り修理、江戸の夷国船来航さわぎの伝聞、紀州の殿様の奥方お困入り、倉賀野助郷人足二千二百人の動員、福島村地頭大久保氏の奥方武州妻沼の知行所への転居、榛名神社大々講に二千八百人の大行列、そのうち玉村の人九十九人両掛持ちで奉仕、日光例幣使万里小路正房は天保の綾小路有長と共に木曾路帰京の唯二人の例幣使で本陣泊まり、南玉村の百姓代弥三郎は亡父の遺志として地頭山田氏へ十兩の冥加金を献金しています。

角洲八幡宮拜殿完成、鷹匠が一汁一菜の規定は規定として昼から酒を出させるなど役人の本値が良く分かります。角洲八幡宮境内への庚甲塔奉納、流行異病の薬や祈祷の状況、死亡者の数は上新田称念寺の過去帳とよく付合っています。

本陣では家屋修理拜借金を五百両願出たのに百五十四両に値切られ、修覆不十分で十年後再度拜借金願を出すといった状況が詳しく記述されています。また六丁目屋台梁上げ、八幡宮楼門の再建開始等のめまぐるしい程の事件の連続です。驚いた事では安芸の宮島厳島神社や京都の愛宕神社からも御免勸化がやってきました。

来年度刊行予定の第五巻は元治元年から明治二年まで最終巻となつて完成する予定です。引続き御愛読の程御願いたします。
(玉村町誌刊行会)

目次

口絵 安政六年二月十四日八幡宮仁王門火・安政六年六月九日日本陣家作料拜借金地頭へ達書
・文久二年九月二十七日流行麻診三幅対・文久三年十一月二十三日常州下総浪人躰の者
取縮方通達
序……………玉村町長 井田金七

凡例	
安政六年……………	六一七
文久二年……………	八七一
安政七年……………	二二二
文久三年……………	八七一
万延元年……………	二八七
あとがき……………	一一〇
万延二年・文久元年……………	四七五

装丁
A5版
上製本
貼箱入り
総頁……………約二三〇頁
口絵……………四頁

第五巻
万延元年から明治二年まで。生糸検査反対の伊勢崎、二之宮、玉村組合代表者三右衛門の大惣代免職、慶応の二度の打ちこわし騒動、関所通行(幕府儀礼)の簡素化、官軍御制札、岩鼻御通達、飯売下女調へ等注目事項多数。平成十二年三月配本予定